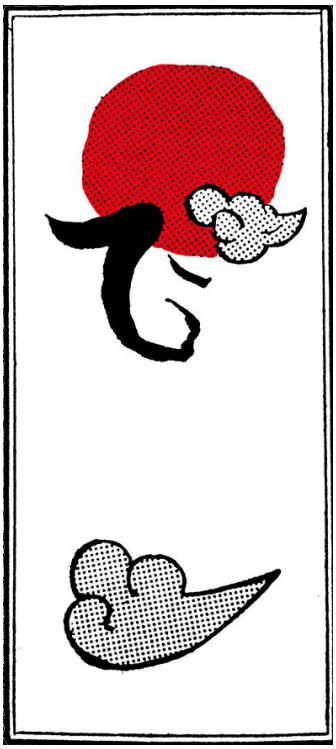

第 36 号
月 1 回 発 行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所：愛媛県西条市
上市甲 720-1
TEL：080-2986-0856

領　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（十一）（大和世界の建設）

竹葉 秀雄

古事記

宇宙の創始

―実在―（一）

「汝自らを知れ」ソクラテス

以上、ソクラテスの大要を記したのであるが、この中に西洋哲学の淵源を見るのである。複重もするが要約して見ると、

第一に、「愛知者」についてである。哲学の原語はフイロソフオス Philosophos で（愛して）と（知）との結合だと言う。「愛知者」は「知を愛する者」でもあるが、その知は単なる知識や科学知でなく、徳なる知である。儒教の「仁知」「良知」「明徳を明らかにする」ことであり、仏教の「仏知」「菩薩知」「般若の知慧」「大円鏡智」など言われるもの、「愛知」愛の知なのである。日本の「天之瓊矛」、玉と矛、愛情と判断の知の一致なのである。人を愛し世を思うの知、その愛知の追求が真の哲学であり、その心あっての認識の拡大深遠の学なのである。その心あって自ら生じる個と全体、特殊と普遍、物と心、主観と客観、観念と実在、概念と実体と、対立するものを結合せんとする思惟、推論の学である。

五官を通じて意識するもの、内なる盲目の川から湧き出づる限り無き欲望、静夜の星暁天の雲から受ける直観霊観啓示、心奥邃く内省に聴くさざめき、これらのものを統一せんとする、ソクラテスの言う「気づかいの哲学」であり、「霊魂の学」であり、「生の哲学」であらねばならぬ。ソフィストの様な詭弁の学や記章訓詁の学であってはならぬ。そこから生まれてくる人生での勇気、節制、知慧、正義などの諸徳となり、毒杯をも仰ぐ「行動哲学」であらねばならぬ、ここに哲学と道徳と宗教との相関がある。極限にまで徹底する内省によって自覚する、客観と主観との相互互入であり、「天人合一」の学である。フイロソフィヤの名に於ける哲学の本質は、東洋の仏教、儒教、神道と相通じ、「愛知」の語は、王陽明の言う「良知」を思わしめるものがある。

第二に、アポロンの神殿に掲げられた「汝自らを知れ」をモットーにした彼の学は、絶対反省の哲学である。哲学とは反省の学であり、反省が哲学である。その反省は大学の書に言う「自ら欺く母れ」の純粋経験、「好色を好むが如く、悪臭を悪むが如き、自慊」によってなされねばならぬ。日本神道が最も重んずる「みそぎ」をもってなされねばならぬ。そこに漸次清まるにつけて、幾多の禍津神（汚穢）が生れ、幾多の直日神（清明）が生れる。愛知即哲学は、みそぎによって漸次清まりの度が高くなっていくように、第一次の反省としての認識、一般に客観に関するもの（他の学と同じく）から、第二次の反省、客観でなく自覚に立つにいたらなければならぬ。（物に格るから物を格す）更に第三次の反省によって、主観客観合一（物に格ると物を格すの合一）の世界にいたらねばならぬ。得たるものを捨て、得たるものを捨て、否定に次ぐに否定をもってし、裏切るに裏切りをもってして、遂に捨て得ないもの、否定し得ないもの、裏切り得ないもの、その大肯定の世界、絶対唯一、無限絶対、「道の道とすべきは常の道にあらず、名の名とすべきは常の名にあらず」の常道、常名の世界にいたるのである。否定に次ぐ否定、矛盾に次ぐ矛盾を求めて、遂に絶対結合の一大円環、天地同根万物一体の仁、天之御中主神に

いたり、無明を極め極めて大光明、天照大御神にいたるのである。（天之御中主神と天照大御神は寂照神変し給う。後に詳論）「自らを知れ」とは反省であり、否定であり、矛盾を極限にまで求む「難問」（a-Poria）の「通路の無い」（a-Poros）ところに通路を付ける難嶮の道中である。これが西洋哲学の道である。

第四章 士道論
～第二節 士 ― 命、志、道～

菅原 兵治

士必ずしも武士のみの言に非ず

「士」―斯くいえば普通一般の人は直ちに「さむらい」即ち「武士」の事と思うであろう。然しこは言語の偶像に惑わされているともいうべきものであって、少しく考えを深むれば士と称するものは必ずしも武士のみに限るべきでないことに直ちに気付くであろう。試みに現代私共の日常「士」と称しているものを挙げて見るも、曰く「文士」曰く「学士」曰く「博士」曰く「禅士」曰く「居士」曰く「弁士」曰く「代議士」曰く「弁護士」……。文に属する方面にも随分「士」と称するものがあるではないか。故に用例よりいうも「士」は決して「武士」のみの言ではないことが明かであろう。況んや東洋古典を味読して「士」とは何ぞやという問題に触れる時など、特にその然るを覚えるであろう。吾が邦に於て「士」即「武士」と解するようになったのは、主として鎌倉時代以後の武家政治時代になってからの事である。私共は「武士」以前に遡って「士」の本質を思弁するの要があるではないか。

士とは所謂義理を行うもの、道徳的行為の主体たるものを指すのである。換言すれば物の奴隷たらず、情欲の馬猿たらざる、真に自律自由なる人格者の言に外ならない。外物（食色、名利、位録等王陽明の所謂軀骸上の欲念）によって、池表の萍の如く、東より風吹けば西に流れ、西より風吹けば東に流るるような自律なきものにならぬことである。この人格の自由無礙の活動については少しく深く内省して見たいと思う。

日本の生活

三浦 夏南

日本人としての生活を再生していく上で正して行きたいことは多々あるが、単純に昔に戻れば良いというものでもないので、勉強し取捨選択する必要がある。例えば、服装を例に挙げてみると、我々の知っている着物が着物の最終形態であり決定版であるかと言えば、そうとも言えないようである。古代には作務衣のような服を着ていたというが、その後はシナの影響を受けて、袖の大きな服になったり、世の中が荒れて争いが多くなると、また動きやすい袖の小さな着物や、ズボンに近い袴が現れたり、その時代状況、地域、階級等によって、日本の着物にも幾多の変遷があるようである。それでは単純に明治以降、あるいは江戸時代以降に着られていた着物が我々に合うものであるかというと、着物の歴史を細かく知ったうえで、選択し、折衷しなければならないであろう。他にも、髪型にも色々の変遷があったようで、単に丁髷に帰れば良いという単純なものでもなさそうである。古代にはみずらという耳の横で二つにくくったような髪型であったと言われているし、長く伸ばして上でくくり、冠をつける時代もあれば、武家の時代になると戦いの為に頭の上を剃って、後ろだけ残すスタイルが生まれたり、そこから江戸時代になって丁髷のような形も現れてきた。しかし、戦いに備えて前髪から頭頂部を剃っても、後ろの髪だけは長く残したことを考えると、現代のように利便性だけを考えて髪全体を短くしてしまうというのは良くないようである。我々はこの髪型に慣れすぎてしまい感じなくなったが、アメリカのネイティブアメリカンが白人たちに髪を切られると、運動能力が落ちたり、第六感が失われたりしたという話を聞いたことがある。これは髪が単に頭を守るために生えているのではなく、霊的なものと深いつながりがあることを示している。そう考えると武士達が生み出した頭頂までを剃り、後ろ髪を残すというスタイルは精神性と利便性が折衷されたハイブリッドな髪型と言えるかもしれない。

我々は郷土に根を張る剛毅木訥な一族を目標としているので、貴族のような服装や髪型はあまり適さない。また官僚化してしまった江戸時代の武士も必ずしも模範とはならないであろう。江戸以前の、戦国、室町、鎌倉の服装や武士だけでなく農民の服装など、色々と調べた上で、精神性がありながら、文弱に流れない、剛

毅なスタイルを探して行きたいと考えている。しかしこれも実際の生活の中で試して見なければ、分かり難いことも多いと思うので、実際に着てみたり、伸ばして剃ってみたりと試行錯誤する中で、古の人が何故その姿に落ち着いたのか、その心が掴めてくるのではないかと思う。

とよくも農園だより

三浦 杏奈

桜も満開を迎え、草木も青々と茂ってきました。一日中快適な気温で過ごすことのできるこの季節は、春風が気持ちよく、外での農作業も捗ります。

今月より、アスパラガスの立茎を開始しました。先月までは、出荷できる長さがくれば、出芽したものは全て収穫していましたが、今月からは親茎を一株あたり三～四本決めてそれらは収穫せずに伸ばします。毎日少しずつ成長し、現在高さ三メートルくらいまで伸びています。夏には繁った親茎の葉が光合成し、養分を貯え、根を張ります。この地点で、いかに良い親茎を適切な間隔で立ち上げるかが今年の夏芽だけでなく、来年の春、夏の収量にも関わってきます。今年は追肥も小まめに行い、土改剤や微量要素などの肥料にもこだわったので、今年の夏芽の収穫が楽しみです。

葉ネギに関しては、今年の春から自分達で苗をたてることにしました。それに伴い、以前貰って帰っていたハウス資材を使って、自分達の敷地内に五メートル×十五メートルのビニールハウスを建設しています。五十センチもの深い穴を掘ったり、鉄パイプを切ったり、水平をとったりと、普段していない作業が多いですが、父に段取りを教えて頂き、道具類をお借りして毎日少しずつ進めています。気温が高くなって、圃場で育てているネギも一気に背が高くなり、収穫されるのを首を伸ばして待っているようです。ハウス建設もネギの収穫も急務なので猫の手も借りたい状況ですが、ケガをしたり体調を崩したりしないように一つ一つの仕事を丁寧に進めて行きたいと思います。

主人が仕事を辞めて家にいるようになってから四カ月が経ちました。家に居る大人が一人でも増えれば、家族間の会話も増え、家事・育児もしやすくなり、子どもの心も安定するように思います。毎日、昼も夜も食卓を家族七人で囲み、毎晩、神前に七人揃って座り参拝が出来る幸せを日々噛みしめて過ごしています。家族

ひいては一族勤皇の精神で家業に励み、学問に励み、武道に励み、礼楽を興し、衣食住を神様にお仕えする気持ちで毎日営むことができたら、それが最も幸せであると思います。過去を振り返ると、時間と共に家族の人数も増え、困難を乗り越えていく中で確実に家族として一歩一歩成長しているように思います。勤皇一族の一助となれるよう、私も自分の立場でできることを常に考え、貢献していきたいという思いを胸に、今日も家族みんなで畑に出ます。

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

一般会員	三千円
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

★振込先

「ひの心を継ぐ会」
愛媛銀行・本町支店・普通預金
口座番号　６－４２７３５

※年会費未納の方はお手数ですが、お振込をお願い致します。
※入会希望・退会希望の際は、事務局までお問合せください。